

## 子どもの命を護らなかつた国

### 新聞に投稿

東京新聞・二〇十三年十二月十一日の発言欄ミラーに、掲載された私の投稿文。

#### 「戦争孤児数 隠した国

金田 茉莉

戦後、東京の上野地下道は戦争孤児であふれ、大勢の子どもたちが餓死・凍死しました。1946年8月23日の第90回・帝国議会で、布利秋議員が「子どもが刻々と死んでおる。戦争孤児の対策はどうなっておるのか」と質問。国は「戦争孤児は3千人。慈善事業が保護している」と答弁しています。それを国民は信じていました。ところが路上生活の孤児の多さに驚いた米国占領軍に命じられた当時の厚生省が、1948年、全国一斉孤児調査をした結果、12万3千5百人も戦争孤児がいたことが判明、同省はこの事実を隠蔽。50年後に見つかりました。

戦争中、都市に住む小学生以下の児童は、親元はなれ地方へ学童疎開しました。その疎開中に都市空襲で家が焼かれ、親・家族が殺され、帰る場所のなくなった孤児が非常に多く生じました。国策として学童疎開を推進してきた当時の文部省官僚は、校長等公務員に箝口令をひき、孤児資料を焼却、隠蔽、疎開中の孤児はいなかったとされてしまったことも、60年後に判明しました。隠蔽され、見捨てられた孤児たちは、路上で餓死・凍死した以外にも、人身売買されたり、路上生活者になったりして苛酷な人生を送りました。

12万以上いた戦争孤児を、たったの3千人と平気で国会で答弁するなど、昔から都合の悪いことは隠す国・官僚。その上、さらに「特定秘密保護法」が施行されれば、ますますウソがまかり通り、真実が闇に葬られ、うっかり話をすれば逮捕される、恐怖・暗黒の世の中になるでしょう。」(以上、新聞掲載文)。

事実でないものは、あとで問題になりますから、新聞社も事実を確認した上で載せません。この文は雑誌の投稿ではなく、大勢の人が見る新聞に、旧文部省、厚生省と名指しているのです。官僚も目にしているはずです。私は官僚の巧みな話術で煙にまくような言い訳をしてくるか、あるいは反論してくるか、そうしたら、いくらでも反論して返す。と秘かに待ち構えていました。ところが官僚からは何の反応がありませんでした。事実だから反論できないのです。

(半世紀以上すぎてからまずいものが出てきた。何かをいえば、かえって藪へびになる。)

これまで闇におかれてきた様々の孤児問題が一気に噴出してくる可能性がある。孤児問題が表立って世間に知られては困る。無視しとけばよい。昔のことだから、そのうち孤児たちも死んでいく。証人がいなくなれば、戦争孤児の問題も、自然に消えてなくなる。そつとしておくに限る)

と考えている官僚の魂胆が透けてみえます。

**官僚はなぜ孤児を隠蔽したのでしょうか。**

1、孤児養育にはお金がかかります。まず孤児施設をつくらなければなりません。子どもを食べさせ、日常の世話や教育など、大人の人員を配置する費用もかかります。空襲による大量の孤児の発生に膨大なお金をかけたくなかった。

2、学童疎開を推進してきた文部官僚は、孤児養育で国に多大の負担をかけるとなれば、その責任を問われかねません。責任を負いたくなかった。と同時に立身を望む高級官僚は「学童疎開で子どもたちの命を空襲の惨禍から守った」と手柄にしたかった。孤児を養育しなければ「子どもたちの命を守った」といえません。孤児の存在が邪魔になり、孤児はいな かったことになってしまおうと、孤児資料を隠滅。そして「子どもたちの命を守った」と自画自賛し、市民も戦後の暗いニュースの多い中、明るい出来事として称賛。現在まで「子どもたちの命を守った」という高い評価が定着しています。

以上述べた以外にも理由があつたかもしれません。

### 学童疎開とは

学童疎開関連の出版物は非常に多くありますので、ここでは簡単に述べます。

太平洋戦争末期、日本の敗色が濃くなり、国内にも敵機が飛来してきました。一九四四年六月「学童疎開促進要綱」が閣議決定され、都会に住む国民学校（小学校）三年生と六年生までの児童が、地方へ疎開することになりました。親戚などの個人的に疎開する場合は縁故疎開といえます。学校ごと集団で旅館やお寺へ疎開した場合は**集団疎開**といえます。大都市児童が根こそぎ疎開になりました。大達茂雄東京都長官は「学童疎開は**帝都学童の戦闘配置**である」と述べ、同年八月、日の丸の小旗をふった父母たちに見送られて児童は集団疎開地へ出発しました。「**疎開児童は子ども出征兵士**」でした。その証拠に沖繩の対馬丸で遭難した疎開児童は、準軍属として靖国神社に祀られ、遺族年金が支

給され、天皇・皇后も対馬丸記念館や追悼碑に訪れています。

東京では各学校五、六百人が集団疎開しました。親がわりに子を保護する集団生活では、校長が児童の全責任を負っていました。その疎開中に都市空襲で家々が焼き尽くされ、親家族が焼死して、疎開中の子どもだけが残されるという事態になり、とくに三月十日は下町全部の学校で大量の孤児が生まれました。

一九四五年八月に敗戦。学童疎開も終了になり、東京へ戻すために、東京都は「帰還児童輸送計画」を立てました。多くの孤児も一緒に東京へもどり親戚へ引き渡されましたが、引き取り手のない児童（孤児）一万七千人が地方に残されました。地方では孤児たちを引き受けたいと大勢が押し付けてきました。当時は若者が兵隊にとられ働き手が不足していましたから、働かせるため、利用するためでした。学校側が「孤児たちを、どしどし養子にだした。くれてやった」という証言は多数あります。そのため、人買いに売られたり、奴隷として牛馬のように酷使されました。

校長は自校の孤児を調査して教育局へ報告しているはずですが、各学校宛て「至急、孤児数を報告せよ」。「孤児の身分、親戚縁者の詳細を調査せよ」という書類が見つかります。その調査した結果がどこにも無いのです。校長や関係者に箝口令をひき、孤児資料を焼却、破棄されてしまい、孤児を語ることはタブーとされてきました。文部省は孤児救済のお金を一切出していないことも、学童疎開の研究から後年になって判明しました。

同じ学童疎開児童でも、対馬丸遭難児童は軍神になり、一方、孤児は闇に葬むられ、歴史からも抹殺されてしまいました。

### あの子（戦争孤児）たちのその後は

私は戦後、五十年すぎたから「学童疎開を研究する会」に入会して、調査をはじめました。その後、厚生省の資料が見つかり、十二万三千五百人の孤児がいたことを、半世紀を過ぎてから、初めて知りました。一般市民は知る由もなかったでしょう。

三年前に三・一一の東日本大震災がありました。空襲はあの津波の跡と全く同じでした。密集していた家々が地上から消え一面の焼け野原がどこまでも続き、焼けあとには黒焦げの焼死体が山積みになっていました。空襲と孤児は切り離せませんが、その空襲の実態も隠蔽され、空襲犠牲者の追悼碑も記念館も補償も何一つありません。

三・一一震災でも震災孤児が生じています。元気がった大切な両親を一瞬で失った衝撃、悲しみ、苦しさは体験者でないと想像できないかもしれません。戦争孤児も震災孤児と同

じ状況でした。心に大きな傷を負い、さらに国からの支援が一切ないため、生死をさまよい、その後は親と一緒に死んだ方が楽だったと思いつながら、悲惨な人生を辿りました。

山本麗子さん（当時九歳、小三）は、東京空襲で両親を失い、三人の子が残されました。六歳の弟さんは餓死、十一歳の兄さんは行方不明になり、彼女は浮浪児になって、刈り込みで捕まり、三十名ほどがトラックに載せられ、茨城県の山奥へ棄てられました。辛酸をなめつくしてきた山本さんは、裁判で証言しています。「国は謝ってほしい。私の人生を返して」と叫びながら、今年の二月に病死しました。

養子先や親戚で虐待された子が逃げ、元住んでいた東京へ戻るのですが、東京は焦土です。食べ物・寝る所もなく、上野駅地下道では次々に子どもが死んでいきました。浮浪児は約四万人、大半が十歳前後（小学生）でした。浮浪児はドブネズミ、野良犬、バイ菌、と呼ばれゴミ扱されました。生きるために盗みをする子を、「不良少年」「貧民家庭の悪ガキ」とされ、人々から毛嫌いされてきました。世間も親が戦争の犠牲になり、保護者のない孤児だ、と知っていたら、暖かい目でみてくれたと思います。

### 道義上も人道的にも許せない行為

今から数年前でした。厚生官僚から電話がきました。厚生省の「全国孤児一斉調査」を送ってくれ」というのです。私は「自分で探してください」と拒否しました。同省も持っていないからです。従軍慰安婦も「証拠の紙がないからやっていない」という人がいますが、都合の悪い書類はすべて焼却、破棄して証拠を残さないのが官僚の手口です。資料無のため戦争孤児研究書はありませんでしたが、戦後六十年以上を経て、ようやく孤児たちの証言や事例、関係者の証言や資料などから、真実が明らかになってきました。

もし、アメリカ占領軍が、孤児調査を命じていなかったなら…。この資料が見つからなかったなら。十二万人以上いた戦争孤児は、永久に消されてしまうところでした。背筋がぞおーと寒くなりました。

孤児も従軍慰安婦に匹敵する人権侵害です。「おかあさん」と呼びながら死んでいった子、一人では生きられない自国の子どもを、遺棄するとは…。親が我が子を棄てるのと同じでしょう。道義上も、人道的にも、許されない犯罪行為だと思います。

弱者切り捨ての隠蔽体質、戦争を美化する現在の空気に、また同じことが起きそうに感じています。

（「子どもを護らなかつた国」の文は、コールサック79号8月末発行に掲載）

毎日雨が降ったりやんだりうつとおしい天気がつつきます。

最近のマスコミは「集団的自衛権」だの「秘密保護法」などが報道され、いよいよ戦争が迫ってきています。安倍総理は口を開けば「国民の命を守るため」といいますが、国民の命は守りません。また、国民は騙されるのでしょうか。戦争をすると、誰が得をするのか、誰が犠牲になるか。その根本を見極めて、先の戦争から学んでほしいと思います。

私はようやく結論を出しました。この結論をだすため長い間、隠蔽されてきた空襲死者の実態や、孤児たちの諸問題の調査をしてきました。七月中に「戦争孤児」のポームページを再開しますが、その「経過・報告」の中の一文をお送りします。これはコールサック七九号（八月三十日発行）にも投稿しました。八月十五日が近づいてきましたので先にお送りします。

私はあの敗戦記念日の「戦没者追悼式」（武道館）を見るたび、怒りがこみ上げてきます。国民向けには「空襲死者も原爆死者も、戦争による戦没者である」といいますが、一方、陰で国は「空襲死者は戦没者でないから補償はない」とされ、戦争指導者の大将（戦争犯罪者）には、年間約一千万円も補償しているのです。矛盾、二枚舌、欺瞞に満ちた式典で、やりきれない思いをしています。　　ごきげんよう。

金田茉莉

二〇一四年七月